

ニューヨークのホリデーシーズン

天理教ニューヨークセンター所長
福井 陽一 Yoichi Fukui

10月末のハロウィンが終わると、ニューヨーク市は一気にホリデーシーズンへと移行し、街全体が華やかな装いに包まれる。今年は市政 400 周年にあたる節目の年でもあり、例年以上に祝祭的な雰囲気が高まっている。感謝祭から新年にかけては、約 800 万人の来訪者が見込まれている。

感謝祭（サンクスギビング）は毎年 11 月の第 4 木曜日に祝われ、アメリカ文化において重要な位置を占める。その象徴的な行事である「メイシーズ・サンクスギビングデー・パレード」は、1924 年に初めて開催され、それ以来アメリカにおけるホリデーシーズンの幕開けを告げる伝統的なイベントとして定着している。沿道には約 350 万人が集まり、自宅で中継を視聴する人は 5,000 万人を超えるとされる。

また、ロックフェラーセンターの巨大なクリスマスツリーをはじめ、各地で行われるイルミネーションやホリデーマーケットは、訪れる人々を魅了し続けている。特に文化協会の近くにあるユニオンスクエア・ホリデーマーケットは代表的な人気スポットとして知られ、多くの人々が家族や友人、恋人への贈り物を求めて訪れる。これらの文化的催しは、経済的側面のみならず、都市の連帯感や季節感の共有といった社会的意義を持つといえよう。

ホームレス児童の増加

しかし、こうした華やかな光景の背後には深刻な社会問題も存在する。近年、ニューヨーク市の公立学校に通うホームレス児童の数が過去最多を更新し、全生徒の 7 人に 1 人に相当する約 15 万 4,000 人に達したと報告されている。この背景には、住宅費の高騰や経済的困窮に加え、不法移民の流入が影響しているとされる。若年のシングルマザーがシェルターで生活を余儀なくされる例も少なくない。

統計によると、ホームレス状態を経験した生徒のうち、約 6 万 5,000 人が市内のシェルターに滞在し、約 7,000 人がモーテルで暮らしている。また、シェルターで暮らす生徒の約 67% は、慢性的な欠席を繰り返し、学力評価において学年相当水準に達している者は 22% にとどまる。2025 年 11 月に予定されているニューヨーク市長選挙では住宅危機問題が主要な論点となっているが、こうした最も脆弱な層の子どもたちへの支援は依然として不十分である。表面的な好景気の一方で、格差拡大が顕著となるアメリカ社会の現状は、弱者への支援の在り方を再考させる契機ともなっている。不景気が続いていると言われている日本のほうが、むしろ生活しやすく弱者に優しい社会なのかなと感じる。

MAHA 運動の展開

近年、アメリカ保健福祉省のロバート・ケネディ・ジュニア長官が提唱する「メイク・アメリカ・ヘルシー・アゲイン (Make America Healthy Again, MAHA)」運動が注目を集めている。同長官は、2025 年 11 月、米国におけるすべてのワクチンから水銀系保存剤を完全に除去したと発表し、世界の保健当局にも

同様の措置を呼びかけた。また、自閉症の増加要因を究明するための大規模な研究を推進し、妊娠中のタイレノール（鎮痛剤）服用が自閉症リスクに関連する可能性を指摘している。

アメリカ疾病統計によれば、8 歳児の 32 人に 1 人、男子では 12 人に 1 人が自閉症と診断されており、1970 年代の「1 万人に 1 人以下」との報告から著しい増加を示している。ケネディ長官は 20 年以上にわたり、米国の子どもたちの慢性疾患の終息を目指しており、同運動は国民的健康意識の再興を促す取り組みとして期待されている。

ニューヨーク天理文化協会においても、自閉症などの発達特性を持つ子どもたちが日本語を学んでおり、教員とスタッフが一体となって心を込めた指導を行っている点は注目に値する。

文化協会の活動と地域社会への貢献

ニューヨーク市の物価上昇は市民生活に大きな影響を与えており、文化機関の運営にもその影響が及んでいる。天理文化協会も例外ではなく、家賃や維持費の上昇により財政的に厳しい状況にある。しかし同協会では、大人クラス約 200 名、子どもクラス約 170 名が登録しており、日本語教育と文化交流の拠点として重要な役割を担っている。

2025 年の夏季には、初の試みとしてサマークラスを開講し、教員らが休暇を返上して授業を行った。子どもたちは毎回の授業を楽しみに通い、保護者からも高い評価を得た。この成果は、教員の献身的努力の賜物といえる。

さらに、国際平和デー（9 月 21 日）には「インターフェイス平和の集い」が開催され、広島・長崎からの平和メッセージ紹介、諸宗教の祈り、天理教代表による追悼の詞や雅楽演奏が行われた。行事の締めくくりとして、ユニオンスクエアまでの平和ウォークが実施され、宗教・文化を超えた平和への連帯が確認された。

ニューヨークは、世界的文化都市としての華やぎと同時に、深刻な社会的不均衡を抱える都市でもある。こうした現実を直視し、文化的活動と社会的支援を両輪とした都市社会を構築していくことが、今後の課題である。天理文化協会はその一助となるべく、地域社会に根差した文化活動を実践している。



インターフェイス平和の集い（文化協会にて）